

ましからぬ顔をするか、辭柄を設けて拒絶するか、常である。此間に在つて目指す重要な資料を閲覽し、更にその寫しを取るに至つては相當の外交術と根氣と熱心とを要する。バーネット氏の管理する資料中には、これより先きスタイン氏が *Ruins of Desert Cathay* の中に報告してゐる回鶻文の俱舍論實義抄を始め、可なり多數の回語の文書類がある筈である。自分はこの資料を目指して先づその閲覽を求めたが、氏のいふところに依ると、今は一片もその種類のものは無いとのことである。管理者が無いといへば此際それ以上突込む譯にはゆかない。幸ひ俱舍論は前にデニソン・ロス氏がロートグラフで撮つて研究にかゝつたなりにほつて居るものがあるのを知つたので、同氏からそれを借りて、ロートグラフを寫眞に取り直した。第一卷百五十枚許りで、余が白鳥博士還曆記念東洋史論叢にこの書を解説した時に、圖版として掲げたのがそれである。併しながら回鶻文書がバ氏の手許に保管せられて居ることは、諸種の報道から疑ふ餘地はないので、翌年即ち大正十年再び倫敦に遊んだ時に、鐵面皮ながらまたバ氏にその閲覽を求めた。尤もこの時には充分に作戦を練つて、當時既に知合となつて居つたスタイン氏自身からバ氏に宛て、回鶻文書全部を余に見せて呉れるやうにと認めた書面を持參した。この書面が功を奏したのか、去年は一枚もなかつた筈の回鶻文書が、俱舍論を始めとして續々提供せられ、その代り一々目録を作つてくれとの註文であつた。かう註文を受けて見るとこちらにも申分がある。館内の窮屈な閲覽室で参考すべき材料もなしに目録を作ることは引受け難い。幸ひまだこの資料は博物館の所藏として登録されてゐないのだから、一部分づゝ自分に貸與すれば、寓居に持ち歸つて研究し、所要の目録を製作しようといふのである。此の談判は遂に思ふ圖に當つて、次々にこの資料を帶出して自由に寫眞も取り、約束通り簡略目録も作つて残して置いた。